



イギリスの冬を体験する

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

冬と通学バス

私の住むレッドヒルから大学のあるギルフォード市までは約 30 km。家から大学までは車で 1 時間弱かかる。どうしてこんな遠くに住んでいるのかというと、コースの半分以上を過ごす実習先の病院がこの地区にあるから。大学での講義は入学から 5 か月続き、コミュニティ/病院での実習はそのあと 2001 年 2 月末に始まる。

東サリー病院までは徒歩 10 分と便利。それまでは講義のある週 4 日、大学まで通うのはなかなか面倒。でも、いったん実習が始まって、夜勤やオンコールを経験したら、病院のそばに住んでいる便利さに気づくはず。

病院には看護/助産学生のための寮があって、学期中は朝夕 1 便、病院—大学の間にスクールバスが出ている。他の季節は問題ないけれど、日の短い冬の間は、病院からバスが出る朝 7 時 25 分も、大学を出る夕方 5 時にも、太陽は出ていなかった。

朝、暗い中をバス停へ歩いて行って、夜明け前のバス停で雨の中バスを待っていると、なんだか惨めに感じることもあった。天気がよければ登校中の車窓から朝日が昇るのが、うとうとしながらでもわかる。大学に着くころには明るくなっていて、あ、また 1 日が始まる、という気になる。そして帰りのバスを待つ頃にはまた真っ暗になっている。

「英国の冬は暗くて寒くて雨ばかりで、鬱になるよー」と来る前に散々脅されていた。そ

のおかげで覚悟はできていたから、この冬は乗り切れた。かえってまわりの英国人が、この気候を初めて体験するかのように天気について毎日こぼすことが、天気そのものよりも気になった。「全くうんざりしちゃうわね。雨ばかりのみじめったらしい天気続きで……」。確かにこの冬は、例年に比べて雨も多かったらしい。

初めてのテスト

2000 年 12 月、冬休みに入る前はなにかと忙しかった。まず 12 月中に初めてのテストがあるし、新年早々締め切りの小論文 2 つとテストがもう 1 つあるので、大学が閉まる前に小論文用の資料を集めて、構成のめどを立てておきたかったし、できれば指導教官に目を通してもらっておきたかった。だから 12 月に入っても、大学が閉まるまでは、クリスマスモードにはなれなかった。

そんななか、カレンがパニックになっている。カレンのパニックはよくあることなので、クラスメートはもう動揺しない。でも、今回はいつもより重大だった。数週間後に試験を控えた生物のノートが、ファイルごと行方不明らしい。「どうしたら家でファイルをなくせるわけ？」 整理整頓が完璧なシャメリーは理解できずにあきれていた。

もちろん、「カレンだから」ファイルもなくなるんだろうけれど、片道 1 時間弱かけて車で通学して、家では子ども 3 人の母親で、週末は老

人ホームで夜勤するカレンの生活で、いつもオーガナイズされた状態を保つなんて無理だろうな、と同情した。

授業が早く終わった日でも、「帰宅しちゃうと勉強できる環境じゃないから」と少し残って勉強しているカレンを校内で見かけることがある。

カレンはクラス最年長の一人(30代後半)で、実は20年近くも前から助産婦になりたいと思っていたらしい。高校を出てすぐに看護学校に入学申請をしたら、理数科の単位が入学基準に達していなくて落とされた。再度挑戦するためにカレッジに入って不足教科の勉強をし直しているところ、夫と出会って結婚、出産。助産婦になる夢はペンディングとなった。

そして下の子が8歳になった昨年、決心し直して入学申請を出して合格、やっと念願かなって勉強を始めた。カレンは家庭と勉強との両立、それに最後に学校へ行行ってからだいふ時間が経っているせいもあって、授業と課題にとても苦労しているのが分かる。

クラスでのカレンは自分の妊娠、出産体験をよく披露してくれる。それが毎回とても感情のこもった話し方で、こっけいに映るらしく、十代のクラスメートはカレンの話が始まると顔を見合わせて「まただよ」とクスクス笑っている。

クリスマス休暇

シャメリーは皆より1週間早く休みを取って、両親の住む夏のニュージーランドへと発った。もちろん、小論文2つをちゃんと仕上げた。

シャメリーも入っているインドのスピリチュアルグループのデンマーク支部で尼さんをしている妹さんが、数年ぶりに帰国できることになったので、シャメリーもこれに便乗することになった。珍しく家族全員が集まるから、大学からも1週間早い冬休みの許可がでた。妹さんは職業上、今度いつ帰省できるか分からないらしい。だからこのクリスマスは、シャメリーの家族皆にとって特別なものになったよう。



大学での空き時間、クラスメートたちがコーヒーショップでおしゃべり。イギリスでの冬の学生生活も雑談で心が和む。

私のほうは、南アフリカから友達イザベルが心配して来てくれた。静かな田舎町レッドヒルを抜け出して、ロンドンでイザベルの友人の友人宅をハウスシッティングして2週間過ごした。気心の知れた、付き合いの長い友達と生活するのはとても気楽だったし、いつもと違う環境というのもいい気分転換になった。シャメリーとの共同生活では遠慮している肉や魚、それにニンニクもたっぷりつかった料理を作って、ワインも開けてクリスマスとお正月を楽しんだ。

それでも学期中に仕上げられず、休みに持ち越した新学期初日締め切りのエッセーのことが気になったし、後半はそれに追われて休暇気分とはいかなかったけれど。

イギリスの冬空のせいで鬱になったとは思わない。けれどイザベルが帰国して、大学が始まり、現実の世界に戻った1月はかなり落ち込んだ。休暇を南半球の出身地で過ごして新学期と同時にイギリスに戻った看護コースの留学生たちの多くも、ディプレッションとホームシックに悩んでいた。しばらくすると皆もとの元気な状態に戻るのだけれど、やはりホームシックは抑えきれない様子。太陽の照りつける南半球の夏のクリスマスから、イギリスの冬の学生生活に戻ってきたら、憂鬱にならないほうがおかしいと思うけれど。日照時間とディプレッション、やはり関係はあるのだろうか。